

アンブロージョ・ロレンツェッティ作サン・ガルガーノ礼拝堂装飾壁画研究——図像プログラムに対する一考察

宮田暁乃(慶應義塾大学)

14世紀中頃、アンブロージョ・ロレンツェッティ(c.1290–1348)は、シエナ近郊モンテシエピの丘に建つサン・ガルガーノ礼拝堂の壁画装飾を行った。聖ガルガヌスは、12世紀に当地で隠遁生活を送り、死後わずか4年ほどで列聖(1185年)された聖人であり、本礼拝堂には彼の生涯の場面とともに、《受胎告知》および《マエスタ》を含む計5場面が現存している。

本連作は、1904年にパーキンスによってアンブロージョ作とされたことを契機に研究が進められ、主に史料解釈を通して、注文主と制作年代の同定が試みられてきた。図像学的側面については、個々の場面に対して多くの説が提出されてきた。とくに受胎の告知を受ける際に柱へ身を寄せる処女マリア像について、1969年にはボルスークが聖地巡礼記を、2016年にはマッローネがアレツォ写本に含まれる俗語讃歌を、それぞれ文学的典拠として指摘している。また1993年にシュミットはヴェネツィアの写本装飾や小型祭壇画などに類似した図像があることを明らかにした。しかしながら、聖ガルガヌスの生涯と聖母マリアの主題が交差する礼拝堂全体の包括的な考察は、十分に行われてきたとはいいがたい。そこで本発表では《受胎告知》と《マエスタ》の図像解釈とともに、礼拝堂全体の図像プログラムの構成意図を明らかにすることを目的とする。

発表ではまず、本礼拝堂および壁画がサン・ガルガーノ修道院のシトー会関係者によって、1330年代半ばに注文されたものと見なす。そして1966年の修復事業で発見されたシノピアと、完成したフレスコ画との差異に注目し、親方であるアンブロージョが画面構成や図像表現の調整に深く関与していたという立場をとる。その上で、奥壁に描かれた《受胎告知》と《マエスタ》の図像表現について考察を行う。《受胎告知》に描かれた、柱に身を寄せる処女マリアの姿は、平信徒に親しまれた讃歌の詩として、あるいは私的空間の小作品の図像として表されるものであった。一方、聖ベルナルドゥスの説教を参照してみるならば、この処女マリアの姿は、「過度な驚き」として警戒された態度に近いことが指摘できる。よって、画家は注文主の意向を踏まえつつも、聖ガルガヌスの死後、多くの人々が奇跡を求めて訪れた巡礼地としての場の機能を考慮した結果、このような図像表現を採用した可能性がある。さらに制作当初は《マエスタ》の聖母像が幼児キリストを伴わず、笏とグローブを携えた「天の女王」として描かれている点について、3つの図像学的・神学的文脈が交錯した結果であることを提言する。すなわち、聖ガルガヌスが幻視したとされる聖母と使徒たちのイメージ、《受胎告知》から《マエスタ》へと至る下から上への垂直構成が示す救済の段階、そしてシトー会、とくに聖ベルナルドゥスの神学思想が確認されるのである。